

氏 名	FIRFOVA Neda (フィルヴァ ネダ)		
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術)		
学 位 記 番 号	甲第 44 号		
学 位 授 与 日	平成 24 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論 文 題 目	印刷メディアを越えて広がる自発的なグラフィックデザインの実践		
審 査 委 員	主 査 教 授	久保田 晃 弘	
	副査 教 授	森 下 清 子	
	副査 准 教 授	山 本 政 幸	
	副査 慶応義塾大学環境情報学部 准教授	田 中 浩 也	

内 容 の 要 旨

情報転送の唯一のメディアとしての印刷物の使用を越える、自らが始めるグラフィックデザインの実践を通して今日のグラフィックデザインを分析するために、私は2つの並行する方法で、本論文での議論を展開する。

この論文の第1章で、私はグラフィックデザインと印刷物の一般的な関係だけでなく、社会的、歴史的な枠組みの中で印刷物の果たしてきた役割について考える。これら印刷物が果たしてきた役割が、どのようにグラフィックデザインという職業に引き継がれたか、またその事がなぜグラフィックデザインという職業に社会的責任を負わせる原因になったのかを論じる。

第2章では、これまでに多くのデザイナーやアーティスト、哲学者たちが議論してきた、アートとグラフィックデザインのあいまいな境界を、様々な視点から議論する。20世紀の初めから、すでにこの疑問については幾度となく議論されており、歴史は同じ事を繰り返している。アートとデザインは異なる歴史の過程で、異なる専門分野として考えられてきたが、両者の重複は不可避であり、おそらくは必要なことであった。この議論は最終的に、ある種のデザインがアートの世界の中に持ち込まれている、現在の状況へとつながっていく。どんな種類のデザインがどんな方法でギャラリーというシステムの中に入っていくのか？どんな種類のデザインが最近流通しているのか？そしてなぜアートの市場やアートギャラリーでデザインの作品がメインストリームとなることがないのか？

この論文のメインである第3章では、前章までに提示した疑問への答えと、現在のグラフィックデザインの文脈におけるいくつかの答を与えてくれる、自らが始める (self-initiated) グラフィックデザインの実践を追う。この40年で商業化された、職業としてのグラフィックデザインから自由を勝ち取る過程で、未だに良い意志を保ち続けている数少ないグラフィックデザイナーたちは、コミュニケーションという彼らの最も強力な武器をコンセプトとに、その職業自体や印刷物に対する批評を続けている。彼らの多くはコンセプチュアルなアプローチが強く、アート作品といえるような作品を作っている。その事例として本章では、Jop van Bennekom, Abake, Manuel Raeder, Alex Rich, Skart, Redesigndeutschland といった現代のグラフィックデザイナーたちに言及している。

上記の実践者の仕事は、私自身が過去3年間に実践し、基礎づけてきたことと関係している。第4章では前章で言及した現代のグラフィックデザイナーたちの仕事をカテゴライズしたのと同じ方法で、私自身の仕事をカテゴライズしながら、並行して論じていく。そうすることで、自分自身の仕事が、どのような状況によって導かれてきたか詳しく分析する。

最後に、コミッション(クライアントからの委託)だけによらない、グラフィックデザインの新しく、オリジナルな秩序について述べる。グラフィックデザインの仕事はクライアントの要求がなくても存在する。さらにはアートとして捉える事もできる。しかしほとんどの場合実践者たちは、自身をその職業や教育によって、グラフィックデザイナーであると定義づける。この現代のグラフィックデザイナーたちから生み出される(大量生産品として手に入れる事の出来ない、オリジナルな制作方法であるリミテッドエディションのような)アート作品は、アート市場の興味を引くことを目的としているのではない。自らが始めるグラフィックデザインは、一般の市場同様、アート市場でも興味を示されない。しかしながらそうした作品はその周囲に、非常に興味深い、独自のスペースを形成している。

審 査 結 果 の 要 旨

本論文の著者のフィルフォバ・ネダはマケドニア出身のグラフィック・デザイナーであり、本論文で展開されるような、ソーシャルかつオープンなデザインを実践するクリエイター/アクティビストでもある。本論文で著者は、今日のグラフィックデザインの起源を印刷メディアの起源と重ね合わせることから見えてくるグラフィックデザインの現在と未来、さらにアートとデザインの境界をコミッション(クライアントからの委託)の有無と関連づけることから浮き彫りになるデザイナー(とアーティスト)の現在と未来を、自発的 (self-initiated) なグラフィックデザインの実践と関連づけて論考した。

論文は全5章から成る。論文の第1章で著者は、読者に、グラフィックデザインと印刷物の一般的な関係だけでなく、社会的、歴史的な枠組みの中で、印刷物の果たしてきた役割を提示する。複製可能で物質的な印刷メディアの役割が、どのようにグラフィックデザインという職業に引き継がれていったのか、またその事がなぜ、グラフィックデザインという職業に社会的責任を負わせる原因になったのかを論じる。

第2章では、これまでに多くのデザイナーやアーティスト、人文学者たちが議論してきた、アートとグラフィックデザインのあいまいな境界を、様々な視点から再検討する。20世紀の初めから、すでにこの疑問については幾度となく議論されており、歴史は同じ事を繰り返しているのは確かである。言うまでもなく、アートとデザインは異なる歴史の過程で、異なる専門分野として考えられてきたが、こうした議論を通じて、両者の重複は不可避であり、おそらくは必要なことであることが次第に共有されてきた。この議論は最終的に、ある種のデザインがアートの世界の中に持ち込まれていく、現在の状況へとつながっていく。そこから生まれるのは、デザインとアートの間から生まれる以下のような設問である。どんな種類のデザインがどんな方法でギャラリーというシステムの中に入っていくのか？どんな種類のデザインが最近流通しているのか？そしてなぜアートの市場やアートギャラリーでデザインの作品がメインストリームとなることがないのか？

この論文のメインとなる第3章では、前章で提示した疑問に対する回答を考察するために、現在のグラフィックデザインの文脈におけるいくつかの重要なテーマと関連した「自発的なグラフィックデザイン」の実践を追う。この40年ですっかり商業化された、職業としてのグラフィックデザインから、再び自由を勝ち取るために、大量生産や商業主義に染まらず、未だに良い意志を保ち続けている数少ないグラフィックデザイナーたちは、コミュニケーションという彼らの最も強力な武器をコンセプトに、その職業自体や印刷物に対する批評を続けている。彼らの多くはコンセプチュアルなアプローチが強く、デザインや商品というよりも、アート作品といえるような作品を作っている。その代表的な事例として本章では、Jop van Bennekom、Abake、Manuel Raeder、Alex Rich、Skart、Redesigndeutschland といった現代のグラフィックデザイナーたちを取り上げ、それぞれの実践活動の姿勢や背景を表形式で分類した。

上記の実践者の仕事は、著者自身が博士課程在籍中の過去3年間に実践し、そこから思考し論じてきたことと深く関係している。論文の第4章では、前章で取り上げた現代の自発的なグラフィックデザイナーたちの仕事をカテゴライズしたのと同じ方法で、著者が自身のデザイン活動をカテゴライズすることで、両者を関連付けながら考察を深めていく。その作業を通じて著者は、半ば意識的に、そして半ば無意識に行われた自分自身の仕事が、

デザインや社会を取り巻くどのような状況によって導かれてきたかを詳しく分析する。

最後の結論で著者は、コミッションだけによらない、グラフィックデザインの、オリジナルで新しい秩序について論じる。そこから見えてくるのは、グラフィックデザインの仕事はクライアントの要求がなくても存在すること、さらにそうしたコミッションによらないデザインの仕事はアートとして捉える事ができることである。しかしほとんどの場合、デザインの実践者たちは、自身をその職業や教育によって、グラフィックデザイナーであると定義づける。この現代のグラフィックデザイナーたちから生み出される（大量生産品として手に入れる事の出来ない、オリジナルな制作方法であるリミテッドエディションのような）アート作品は、伝統的なアート市場の興味を引くことを目的としてはいない。

自発的なグラフィックデザインは、一般の市場同様、アート市場でも興味を示されない。しかしながらこれらの作品は、ソフトウェアにおけるオープンソースやクリエイティブ・コモンズのように、あるいはものづくりにおける、Make や FabLab のような DIWO (Do It With Others) の動きと連動しながら、その周囲に非常に興味深い、独自のコミュニティを形成し始めた。本論文は今日のクラウドや SNS 時代における「オープン」や「シェア」といったキーワードで特徴付けられる、さまざまな協調的、共同的なポスト競争時代の創造的活動を、グラフィックデザインという観点から、メディア的、歴史的な経緯も含めて位置付けた先駆的な研究であり、その今日のかつ美術デザインの意義は非常に高い。以上のような観点を総合し、審査委員の総意として、本論文を学位を授与するに相当のものと認める。